横浜市立大学学術情報センター

貴重書
月替わり展覧会リーフレット
（177）

2026年6月の作品は

『江戸大節用海内蔵』

―江戸時代の日用辞典―

展示テーマ

～当時の生活における武士や刀～

当リーフレットでは、前作に引き続き『江戸大節用内海蔵』を取り扱う。節用集のなかの武将と刀のページを紹介する。

平和な江戸時代の人々の目には、過去の武将達や刀など武力を司るものはどのように映っていたのだろうか。また、当時の刀剣の用途はどのようなもので、節用集にはそれがどのように反映されているのか考察する。

『江戸大節用海内蔵』

全２冊

江戸時代、文久３年（1863 年）

版元：山城屋左兵衛

縦 27cm × 横 19cm

～展示の見どころ～

武将と刀についての情報

（１）本朝百将傳（過去の武将一覧）

絵付きの武将の紹介が掲載されている。当時の武将がどのような評価を得ていたのかがわかる。裏面に示した右の図版の左に平清盛、左の図版の右に源義仲、左に源頼朝が描かれている。彼らは華々しい英雄としてではなく、客観的な来歴がまとめられていることがわかる。以下の文章からも、その来歴については、現代社会に伝わるものと大きな差はないと考える。

平清盛

「平忠盛の子なりといへども実は白河上皇の落胤なり曾て保元平治の乱に朝敵をうち滅して威勢国中に冠たれば、次第に昇進して大相国にいたり一門高位高官に昇り二十有餘年の栄花実に天下の耳目を驚かせり後に入道して浄海という驕暴奢侈いふべからず　実に古今の栄盧なり」

源頼朝

「左馬頭義朝の三男なり平治の乱に敗走して父と倶に奔りしに擒となりて誅せゝすんとき池の禅尼これを憐れみ清盛に請て伊豆に流すこゝにあること二十餘年高倉宮の令旨を得て一度勃起するに及び義仲を討し平家を滅し終に日本總追捕使となる武家　扶桑を管領する肪なり」

源義仲

「帯刀先生義賢の子なり義賢武蔵の大倉谷に亡ぶ時義仲僅に三才乳母子中三権頭兼遠これを負く信州に奔るここに於て成長なし岐蘇を以て称号としここに高倉宮の令旨を得て寄々兵を催ほし、終に木曾をうち立つてただ一挙に平家を逐下した功により征夷将軍に任ず惜しいかな暴行に名を下す」

図版１　平清盛（左）

図版２　源頼朝（左）、源義仲（右）

（２）刀剣の大概

剣と刀、太刀の説明が掲載されている。

「刀剣の大概

刀に似て両刃なるもの

剣　和名豆留岐　本朝上古ハたゞ剣のみ也、神代素戔嗚尊、大蛇を斬給ふも剣なり、その尾より出る天叢雲の剣後に草薙の剣といふ　按るに、干将・莫邪が剣は、古への名剣なりしけるに、太平広記にミな銅を以て造る、鉄にハ非ざる也と、ある時ハ甚不審也、銅にて物を斬べからず

刀　直烱乱烱の数品あり

刀は剣に似て両刃ならず今の刀は太刀と同じ但し佩と挿との差ひあるのみ欄の中に入る＊（缶十刂）といふまた中心に作る」

図版３　刀剣の大概

はじめに剣の説明が入るが、剣自体の構造よりも逸話が有名な剣を詳しく紹介している。次に刀、太刀の説明と図解が続く。刀や太刀には詳しい図解があるにも関わらず、剣にはない。

以下はあくまで筆者の予想であるが、その理由は当時剣がそれほど生活に身近なものではなかったからだと考えられる。このため民衆の興味を惹くような逸話を持つ剣が紹介されていると考える。また、当時武士が帯刀した「刀」は打刀を指し、打刀と脇差の二本を差していた。それ以外の脇差や短刀は町人たちも当たり前のように持っていた。刀は武将の象徴だけでなく、ファッションアイテムとしても使われていた。次第に農民や町人の脇差帯刀は規制されていくが、このような存在という価値観は長く残った。しかし、文久の年は激動の時代となり、浪士による狼藉が相次ぎ、刀は本来の武器としての役割を取り戻してしまったという時代背景がある。筆者は、文久の時代に刀が武器として実用されたという背景が、刀の構造に関する情報の需要増加につながったと考える。

参考文献

・佐藤貴裕（2017）『節用州と近世出版』和泉書院　７～９頁
・尾脇秀和（2018）『刀の明治維新』吉川弘文館　８～169 頁

あとがき　～貴重資料に触れて～

このリーフレットを作成し、江戸時代の武力への見方を垣間見ることができました。特に、人々の武器へのまなざしがあこがれから恐怖へと変わっていく様は、現代も同様に起こりうると考えました。現代において武器がその役割を再び取り戻さないよう、努める必要があることを意識していただけたら幸いです。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、
展示品を除き申請が必要です。また利用は
学術研究目的に限らせていただいております。
※過去の展示はオンラインでも公開中です！
※第 178 回展示は令和８年７月上旬からを予定

令和８年６月１日発行
令和７年度　日本文化史Ｂ受講生 編集
236-0027　横浜市金沢区瀬戸 22-2
横浜市立大学　学術情報センター